

7月28日午後4時27分頃、熊本を震源として発生した大規模な地震により、お亡くなりになられた方々に謹んで哀悼の意を表しますとともに、ご遺族の皆様には心よりお悔やみ申し上げます。また、被災されたすべての皆様には心よりお見舞い申し上げます。

毎日猛暑が続きますね。蝉もジージーと鳴き出し始めるのは朝の5時。8時になるとセミの鳴き声も鳴りやむくらい気温は上昇。昼頃には外気温は36度を超えて蝉の声すら聞こえない。年々暑さが増す中、5歳児のお泊り保育も全身体調を崩すことなく、無事に終えることができました。子どもたちはどのクラスも、毎日水遊びやプールを楽しみ始めました。近年この猛暑は10月くらいまで続くので、保育の年間計画もこの長い夏をどう楽しむか…保育士も子どもたちが熱中症にならないか、クーラー潰けの日々になっていないか心配したり悩んだりしながら、夏の遊びを満喫してほしいと思っています。

今月号のアトムっ子巻頭は、アトムの元園長、野中常務理事に地域拠点での出来事を書いてもらいました。

園長 志賀 教子



たて、よこ、ななめ ゆるやかに

アトム共同福祉会 野中 泉

こんにちは、アトムっ子は、少し、おひさしぶりの野中です。園長を定年退職したとは言っても、毎日アトムかつばさに出勤(?)しているので、アトムの保護者からは「なんだ、案外会えるんだね」と笑われたりもします。こんなふうに見ると去年までとあまり変わらない毎日みたいですが、私自身は保育園の真ん中にいたこれまでとは、少し違う風景の中にいると感じています。特に、アトムのとなりの小さな部屋（地域拠点）にいる時には、アトム・つばさの職員（理事）ではなく、ただの地域のおばちゃんとして、小学生たちや赤ちゃんを連れて若いお母さんに相対している自分がなんだかとても新鮮で楽しいのです。

つい先日のことです。拠点で学習支援をしてくれているボランティア講師の人たちとおしゃべりをしていたのですが、その中のひとりがこんなことを言いました。「子どもたちに、どんな大人として接するか悩む。宿題終わった子が遊んでいくのはいいんだけど、暴れたりしたら、どのくらいまで厳しくダメって言えばいいの」。長年教鞭をとられていた人（共学舎の学習ボランティアの人の多くは学校の先生のOBです）の言葉としては意外な気もして「ダメなことは、ダメと教えてください。遠慮せずに」と言ったのですが、「いや、でも私が厳しくしたことで、あの子がここに来たくなかったら嫌やなと思って。せっかく、ここが気に入ってくれて、私なんかともたわいもないおしゃべりしてくれる子どもたちとの関係がいいなと思って」。結局、みんなで「ここには厳しい人も、甘い人も、いろんな大人がいていいんじゃないか」「いろんな大人がいるからこそ、いろんな子どもが来やすい」という話になったのですが、こんなふうには、その子の親でも先生でもない他所の大人たちが、その子にとってどんな大人であつたらいいかを悩んでいる、そのことがもはや、いいなあと思わずにはいられません。

そんな大人たちの姿勢が伝わるのでしょうか。共学舎の営業マン(?)は、子どもたち自身。「お前らも、宿題持ってこいや」と得意げに友だちをひき連れてくる子たちが、実はおせじにも「勉強好き」とは言えない子たちなのも不思議です。その中のひとりS君は小学5年生、アトムの卒園児でアトム・つばさ塾の常連でもある彼は、わり算に苦戦中、算数の宿題の前ではいつもため息ついて、時にはお手上げとばかりに寝転がって、ボランティアの先生たちに「ほら、がんばれ」とおしりを叩かれているような子です。そのS君が、育む会の代表でもありアトム・つばさ塾や共学舎の活動を中心に担ってくださっている木村さんにこんな話をしたと教えてもらいました。「木村のおっちゃんが、死んだら、塾はどうなるん?」「えっ?死んだらあ、そうやな誰かが代わりにやってくれたらいいけどな」。するとなんとS君「そしたら、おれがやるわ」と堂々の後継者宣言。その話がおもしろくて木村さんが家に帰って家族に話したら「いや、じいじの後はおれやろ」と4年生のお孫さんも対抗心からか、まさかの立候補!そこまで含めてお聞きして「一銭ももうからないのに、後継者争いですか」と一緒に笑ったのですが、この話も、やっぱり、しみじみといいなあと聞かせてもらいました。

地域の子どもの豊かな育ちを支えるには、たての関係（親や学校の先生）やよこの関係（同世代のともだち）だけでなく、ななめの関係（直接の利害関係がない親以外の大人など）が必要。そう地域支援や子育て支援の場で語られるようになって、もうずいぶんたちます。でも、実際の地域は、そのまったく逆の方向に進む一方です。「知らない大人とは口をきいてはいけない」そんなふうには教えられながら育つ子どもたちが親になる近い将来、アトムやつばさはどんな園になっているのでしょうか。そんなことを、地域のおばちゃんのひとりである私は、一生懸命考えながら、今日も地域の小さな拠点のドアを開けています。